11 月第 1 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 11 月 5 日（日）10：30－11：30　降誕前第 8 主日（召天者記念礼拝）

■説　教： 保科けい子牧師

■説教題：「 永遠の命を得るため 」

■聖　書　新約：ヨハネによる福音書 3 章 13～21 節（新約 p167～168）

■讃美歌：3「 扉を開きて われを導き 」484「 主われを愛す、」

本日、11月第一週の主日礼拝は召天者記念礼拝です。立川教会で信仰者としての生涯を全うされた方々に思いを馳せ、また、すでに天に召された私どもの親しい方々を覚えて、この礼拝を守っています。そういうわけで、本日の礼拝には、天に召された方々と深い関わりのあるご遺族の方々も出席なさっています。私が立川教会にまいりまして2年目になりました今年、ご遺族の方にお知らせをお送りするために、召天された方々の名簿を9月ごろから時々見ておりました。名前を存じ上げない多くの方々が、これまでにこの立川教会に様々な形で連なっておられ、そして天に召されていったことが分かりました。同じように私たちも、遅かれ早かれ誰もが天に召されていきます。そういう意味では、召天者を覚えて守るこの礼拝は、私たち一人ひとりのこれからの歩みを思いつつささげる礼拝でもあるのです。そのように考えながら過ごしていた先週、月曜日ぐらいだったと思いますが、ある牧師がお亡くなりになったという連絡が入りました。かつて、私と夫は静岡県の真ん中に位置する中静分区の教会に仕えておりましたが、その牧師とはその時以来のお付き合いがありました。また、同時期に同じ静岡に遣わされており、母教会の青年会でも共に活動した同年齢の牧師が4月末に召されています。さらにさかのぼれば１月には、今から31年前に吉祥寺教会で共に按手を受けて正教師となった牧師も召されました。三人とも癌という病を得て闘病中でしたが、召される直前まで現職の牧師として働いておられました。私自身が昨年の12月に癌で手術をしましたので、今このように生かされていることを感謝すると同時に、本日の召天者記念礼拝に特別の思いを抱かざるを得ません。

さて、本日の聖書箇所は聖餐式の中で朗読している御言葉の一つであるヨハネによる福音書3章16節「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」が含まれていますので、覚えておられる方も多いことでしょう。先週もお話しした宗教改革者のマルティン・ルターは、この御言葉を「小さな聖書」という意味で「小聖書」、または「小型の福音」という意味で「小福音」と呼んだと言われています。この短い御言葉の中に福音の全体が要約されている、という意味です。ルターは、聖書というのは、イエス・キリストがそ

こに寝かされている飼い葉桶のようなものだとも言いました。私たちは、聖書を通して、主イエス・キリストとお会いすることができる、言い換えれば、聖書は私たちが主イエス・キリストと出会う場所だと言うのです。そして、その聖書が証しする福音（主なる神様からの喜ばしい訪れ）の全体が、このヨハネによる福音書第3章16節に集約されている、と語ったのです。ルターは死の間際に、このヨハネによる福音書3章16節の御言葉を口にして、祈りつつ息を引き取ったと伝えられています。「主イエス・キリストよ、私の魂をあなたに委ねさせてください。天の父よ、私はこの体から引き裂かれようとも、あなたのもとでとこしえに生きることを知っています。神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。これは本当のことだ。アーメン。父よ、あなたの御手に私の魂を委ねます」。そう祈って、生涯を閉じたと伝えられています。

では、私自身はどうだろうか、そのような自分自身への問いを投げかけながら、先週一週間を過ごしました。なぜなら、私が毎日見聞きするのは世界のあちらこちらで起こっている戦争や紛争のニュースであり、それらを前にして本当に無力である自分自身を思い知らされているからです。多くの人々が混乱と悲惨な状況に置かれている今の現実の中で、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」という御言葉を素直に聞き続けることができるだろうか、とも思います。そのような中で、この世が平和で安定しているので、主なる神は安心して独り子をお与えになるというのではない、ということを深く考えさせられました。日本に住む私たちの多くは、その日の食物にも事欠くという困窮も知らず平安のうちに日々を過ごしています。しかし世界に目を向ければ、その行く先がなかなか見えて来ず、国が失われ人々が戦いに駆り出されるという絶望的な状況あちらこちらに見えてきます。特に今、困難な状況にあるのは聖書の世界であるイスラエルの地です。それらのことを考え合わせてみると、人々が呻き泣く声の満ちているこの世だからこそ、主なる神はこの世を愛されるのではないか、そして、それゆえに独り子をお与えくださったのではないか、それが本当の意味での福音ではないかと思えるようになったのです。

主なる神が独り子をこの世にくださった歴史上の出来事が起こった2000年前も、国と国の間や民族と民族の間に敵対する状況があり、多くの人々が苦しみや悲しみの中に置かれていました。その時代も現在も、そのことにおいては変わりがありません。だからこそ、主なる神様は「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため」に、「世を裁くためではなく、御子によって世が救われるため」に「その独り子をお与えになった」のです。私たちは、その独り子が十字架において裂かれた身体と流された血潮を信じることによってのみ、永遠の命を得るという救いの道を見出せるのではないでしょうか。「永遠の命」という言葉は、ヨハネによる福音書では17回も記されています。ほ

かの三つの福音書に比べてとても多いので、永遠の命の福音書と呼ばれることもあります。しかし「永遠の命」というのは、私たちが体感する時間の長さでとらえることができません。ヨハネによる福音書では17章3節で、主イエスの祈りの言葉として次のように記しています。「永遠の命とは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」その御言葉から、私は本当にイエス・キリストというお方を知りたいと願っているだろうかと考えさせられておりました。そして、金曜日の夕方のニュースで、多くの攻撃を受けてほとんど元の形を失ってしまったガザ地区で「僕は何も悪いことはしていないのになぜ」と泣き叫ぶ少年の映像を見ました。言葉にならない風景がそこに広がっていました。私はその映像を見て自分自身の無力さに打ちのめされる思いでしたが、まさにそのような現実の中であるからこそ、主イエス・キリストの十字架は立てられているという思いも与えられました。そして今、本当に私たちが問われているのは「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」という御言葉を、主なる神様から差し出されている救いの御言葉として受け止めることができるかどうかということなのではないか、と気づかされました。今、この瞬間にも世界のあちらこちらでは多くの命が失われているはずです。その厳しい現実に目を閉じることなく耳を塞ぐことなく、そのような現実であるからこそ、私たちは主なる神様がこの世の営みに介入し、平和をもたらしてくださることを確信して祈り続けましょう。